

多良嶽西麓地方の地理的景觀 (二)

森 壽 美 衛

四、北部—大野原鎔岩臺地

- 1、概説
- 2、海岸地域の特色
- 3、武留路山附近
- 4、千綿川幼年谷
- 5、大野原

1. 概説

多良嶽西麓地方の北部には玄武岩を以て構成された海拔三四百メートルの臺地があつて、緩に西に傾斜し斷崖を以て大村灣に終つてゐる。臺地の表面は波狀の起伏を呈し、其間に武留路山、中尾山のやうな角閃安山岩の塊狀火山や鉢卷山等の玄武岩丘が噴出して單調を破つてゐる所もある。この地域は地形上から小さく區分すれば、平地の乏しい海岸地域、小火山丘の群立する武留路山附近、峡谷の千綿川幼年谷、及本地域の

標式的鎔岩臺地である大野原の四つの地域とすることが出来る。

又耕作、聚落等の人文景觀を主として眺める

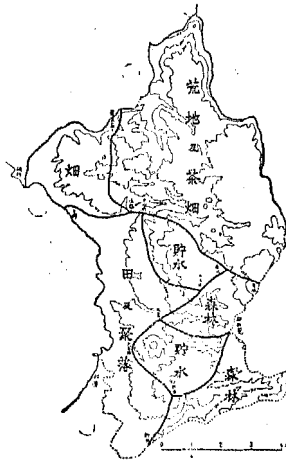
第九圖



と、第九圖及び第十圖に示すやうに七つの地域に分つことが出来る。文化景觀圖と言ふことは當を得てゐないかも知れぬが⑧を素讀したのみ

でかう言ひたいと思つたに過ぎない。小火山丘の多い武留路山を中心とする臺地の南半では、郡嶽麓に南北二つの森林地帯がある。南のものは針葉樹が多く北では潤葉樹を多く交へてゐるのを特色とする。森林地帯は重要な水源涵養

第十圖



地となつて、南のものも北のものも夫々隣接する地に溜池の多い地域が亦二つ現出されたのであらう。今假りにこれを貯水地域と呼びたいと思ふ。高原上の耕作には峡谷の底を奔走する川水は利用し難いので、森林隣接地方の高所にある谷間の一部に築堤によつて溜池をつくり灌漑用水を貯へることになつてゐる。南部には野岳

の溜池をはじめ十五個、北には蕪池、鹿ノ丸池等六個の大小の池が比較的密集して存在してゐる様子は、一般に多雨な爲めかゝる用水池の少い當半島地方では珍らしい現象である。

森林及び貯水地帯に續く地方である大體高度二百米以下の臺地から谷及び海に臨む急崖までは、多くは田として耕作せられ、其の間小聚落が到る處に散在して、正に多良嶽西麓地方北部の聚落地帯を形成して居るので、こゝに田及び聚落地帯と稱へたいのである。

次に臺地の北半、所謂大野原の臺地は殆ど大部草原の荒地であつて陸軍演習場となつて練武に利用せられ、その草地の間は所々開墾されて美しい茶畑が点在してゐる。西北部千綿、彼杵村境地方は海岸より山上までよく開墾されてはゐるが、奥地に水を得る所がない爲めであらうか、其の全部を畑とせねばならなかつたやうである。

2. 海岸地域の特色

こゝで海岸地域と言ふのは松原以北彼杵まで

としたい。海岸線の方向は松原千綿間ではほぼ南北であるが、それから北は次第に西北に轉じ、彼杵を経て川棚に達する直線的の海岸となつてゐる。此の地方の海岸線は幾らか小出入はあるものゝ、概ね單調で時に數十米の急崖となつてゐる所もある。この斷崖の多い海岸は既述のやうに斷層海岸であらうと思はれる。海岸の突出部は山陵の末端で海蝕も加つた急崖を以て終り、その間僅かに彎入してゐる灣頭には小流注ぎ、細長い三角形の沖積地が奥に入り込んでゐる谷の出口に當つてゐる。河流の作用による堆積は現今の地形に現はれた沈水谷を漸く埋め盡した程度まで進んでゐるに過ぎない。

肥前半島の主體部から西彼杵、島原等の更に分岐した半島部地方への通路は、多良嶽に妨げられてその東西麓の海岸線に沿つて設けられた大村灣岸の國道は大野原臺地の部分では特に甚だしく地形の支配を受けてゐるのである。灣頭の低地では道路は平坦で、一二の小川を渡る橋を架して沿岸に三ヶ月形に通じてゐるが、間も

なく山に差しかゝるから、急な坂を曲り上つて海中に突き出た崖の上を越す。そして次の彎入の低地に再び入り込むのである。文明の交通機關鐵道は道路のやうに素直に地形の制約を受けないで突出した山地は出來得る限り切り開いて曲り出た道路の内側を通り、又才貫田、一木松のやうに隧道によつて國道の下をくゞり、入江の岸では新に埋立を行ひ内側の道路との間にはさゝやかな流れの注入する小さい人工湖を作つて汽車は海中を走る。鐵道工事には垂直及び水平の曲線を少くしやうとした人間の苦心が明かに示されてゐる。

かやうに松原以北千綿までは自然の海岸線に縁取つて屈曲した道路を鐵道が直線的に貫いたために少々海岸線の修飾が行はれてゐる。千綿以北彼杵、川棚等では千綿川、彼杵川、及び川棚川等夫々同名のやゝ大きい川があつて、その下流には稍々廣い沖積地が發達し、その尖端に各々密集部落が發達したので、海岸の崖上又は崖下を経て來た道は山を離れると殆ど直線的に

其等の聚落に達し、街の中央を貫通しやうとするに反し、鐵道は聚落の背後に廻るから、千綿より南と北とでは道路と鐵道の位置關係が相反するのである。

この海岸地域の耕作地の分布と地形との關係を見るに、平地には水田、山地の傾斜面は森林と言ふ通則を破つて著しい特徴を現出してゐる。二萬五千分之一地形圖上に於て田に着色して見ると、海岸附近は平地から山陵末端や幼い谷の急斜面まで一面に塗らねばならぬので異様な感に打たれるのである。この特異な景觀は當地方の人が自然を利用するに當つて採つた方法の最も自然的のものであつたやうである。米作の耕地を得る平地が極めて少いので、溜池や川から引いた水のかゝる所は地形を無視して田としてしまつた。松原、千綿間汽車の窓から見上げる急崖はすべて美しい階段状の米田であるのは珍らしい。山の鞍部の上まで米が作られてゐるから、夏季の國道傍雜木の茂る崖にかゝる瀧は清冽な水と思ひきや一度崖を上つて山背に達すれば、青々とした稻田を通過した最後の水である

ば、青々とした稻田を通過した最後の水である

第十一圖 千綿附近の海岸

緩かに西に傾斜する鎔岩臺地が大村灣に盡きる所、一本松トンネル附近を東南から見たものである。

S 聚落 海岸には居住地を定める餘地がないから、標高七〇—一〇〇米の臺地上に發達した。

T 田 傾斜の緩急を論ぜず能ふ限り水を引き階段を設けて水田となし立派に耕作されてゐる。

Z 雜木林 崖や硬い岩石の多く露出してゐる所等には所々に竹を多く交へる雜木林がある。

m 舊道 最初の通路は海岸の斷崖を避け、自然の地形に順應して海拔三〇—四〇米の高所に出来た。

M 國道 新しい國道はそれより下海面上二〇米内外の部分に、自然の地形を多少修飾して崖を鑿ち、石垣を築き等して、幅廣く勾配を少くして建設された。

L 長崎本線 最近文化の交通機關鐵道はよく自然の障害を征服し、崖下の海中に埋立を行ひ、線路の外側には防波壁を設け、突出した山脚部は隧道を穿つて直線的に貫通した。

以上の垂直的分布を表示すれば次のやうになる。

落	聚
田	田
道	道
田	及
道	國
崖	斷
道	鐵
面	海

のに驚かされるのである。

第十圖



聚落も里、千綿及び彼岸等の大なるものを除く外は殊ど狭い海岸や河岸を隔てた山腹又は臺地上に散在してゐる。(第九圖)(第一一圖)其處は低地よりも却つて地積が廣く、眺望も亦よく開けて住み心地もよい。しかし海岸の幹線直路や停車場に出るのには曲りくねつた急坂を下るか或は新しい道を迂廻しなければならぬ缺點がある。

3. 武留路山附近

多良嶽の西部に屹立する郡嶽(八二六米)の西麓には、三百米以下の高度を有する玄武岩の波状を呈する臺地が緩かに傾斜して大村灣岸に達する。この臺地上には武留路山(三五六米)、鉢巻山(三三四米)及び飯盛山(三三六米)の三山がほぼ同じ高さに鼎立して地形の單調を破るのである。武留路山は角閃安山岩より構成される鐘狀火山で大村扇狀地の北方近くに聳え城址もある秀麗な山である。後二者は玄武岩より成るやや突起した山と言ふ程度のもので風景に於ては武留路山に一歩を譲つて居る。

臺地の水系を觀察するに南部に郡川の支流佐奈川内川、北には江串川その中間に松原川及餅濱川(この二川は松原村の南境及び北境を限つてゐる)があつて何れも西流し、川の大さに比例する峽谷を穿つてゐる。佐奈川内川の支流には鉢巻山の南東に裏見瀧、江串川の支流には大樽瀧、小樽瀧等があるから、谷はまだ幼年の時期にあると云ふことが明かである。

裏見瀧は野岳の溜池のある谷の水の流れ落ちる所にある。その本流の佐奈川内川が深い峽谷を奥地に向つて切り込んだので支流に瀧を生じ現今の所まで後退してゐる。上部は硬い鎔岩であるから下部の岩石は早く崩れ、瀧の後に觀瀑の通路が出来た。それで御手水の瀧と云ふのが本來の名稱であるが裏見瀧と云ふ別名が出来た而して現今ではその別名が本名となつてゐるやうである。

大樽瀧は鎔岩流の末端に當る所にかゝつてゐる。本流江串川は支流よりも水量が多いから、侵蝕も進んで、瀧は支流にかゝる小樽瀧よりも

稍々奥地に入り込み、上部の谷も深いので瀧其のものゝ高さは小樽瀧に劣る。それで前者を雌瀧、後者を雄瀧と呼ぶのであらう。

松原附近の正しく南北の方向を有する長崎木線を底邊とし、裏見瀧を頂點とする二等邊三角形の區域は、前記の田及び聚落地域の南半であつて、福重村の今富、立福寺、彌勒寺、矢上、草場、松原村の野岳、東光寺、今山、山下、北木場、寺本及び千綿村武留路等の各郷を含み、地表の大部が田となつてゐる。よく耕作された緩傾斜に百數十の小部落が散在して此地域の特色を發揮して居る。高地の灌漑水は溜池又は川の上流から引いて來て各田に分配するのであるから、用水は低い谷間を流れないで野岳から矢上に通ずるものゝやうにコントロールの突出した鞍部を道路と並行して流れる奇觀を呈してゐる。野岳溜池は自然の谷をその峽谷部に於て堰き止めた最も大きい池でもとの支谷は數個の入江となつて居る。池の水は直ちに灌漑用水として田に引かれるので、裏見瀧の侵蝕後退の力は著し

く削減されて、却つて山背を下る野岳以下の用水路に小規模の峽谷を刻みつゝあるのである。松原以南の前記各郷から上つて來た道路は野岳に集合し、こゝに統一されて更に奥地の聚落へ連絡してゐる。

美しい甲狀を呈する角閃安山岩の武留路山は殆ど全く潤葉樹の多い森林に蔽はれ、普通玄武岩より構成される緩傾斜の鉢卷山は北東面一部分を残して頂上近くまで畑に開墾されてゐるし安山岩質玄武岩より成る飯盛山は大部荒地である。此の三火山丘は正しく一軒四分之一の距離を隔て、正三角形の位置に鼎立しながら、夫々岩質を異にしその開墾の相まで三つが三様であるものおもしろいことである。

江串川以北も以南と同様の景觀であるが、貯水地域の西縁には小丘陵突起し外側は急に百米下つて田及聚落地域の緩斜面に接するのである。草原の荒地に接した池は水源を求めめるにも苦心があつた。千綿川上流から水を疏して山腹を迂廻し燕池に注入せしむる等がそれである。

以上のやうに鎔岩臺地の南半は多くの人々の拂つた努力によつて開拓は餘程進んで居る。散在する幾百の小部落は何れも純農村で、田畑に働くにも、市場に出るにも、又兒童の通學するにも皆緩急交互に來る坂を上り下しなければならぬ。山上には大きな都邑がないから道路もまだ

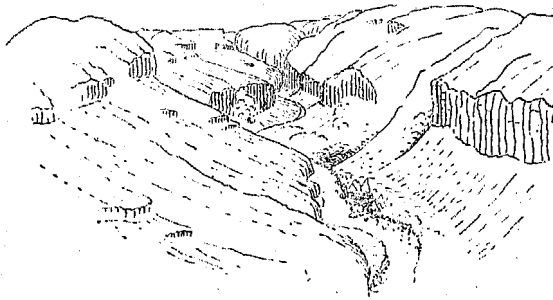
良くない。荷馬車の通行する道も時折あるが、多くの物質はやはり人肩馬背によつて運搬されて居る。斯く交通不便は免れ得ないが、目前を遮る何物もなく脚下には静かな大村灣を見下し大村、臼島、箕島等の勝景から遙に横たはるむつくりとした平坦狀の西彼岸半島、長崎附近の突兀とした火山性山地等を眺めることが出來て打開いた雄大な景色の中に長閑に明け暮れる農民は、不便を差引いて尙餘りある幸福な生活をするであらう。

4. 千綿川幼年谷

多良嶽西北部に展開して居る玄武岩臺地には既述のやうに川の作用によつて屢々幼年の峽谷を形成したのであるが、其等の中で規模の大き

いものは西流して大村灣に注ぐ千綿川と北流して嬉野川の支流となるものであらう。後者の谷底にはすでに耕地や廣い道路も發達してゐるが、前者は著しく狭い崖の直立する谷で峽谷美の壯觀は千綿川に若くものはない。

第二十圖



千綿川沿岸には河口に臨む千綿の町から入反田、鹽鶴を経て下川内まで約二軒の間は狭いながらも沖積地を形成し、水は容易に得られるから水田が發達してゐるが、それより上流約四軒の間は比高二百米内外の峽谷を穿ち通路さへも開くことが出來ぬ驚くべき深い谷

である（第一二圖）。硬い玄武岩は屢々數十米の懸崖を以て谷の兩側に屹立し、下には美しい崖錐を引いて溪流に臨んでゐる所もある。支流の侵蝕はまだ幾くも進行せず屢々懸垂合流を見るのである。

東彼杵郡誌⑨には此の谷の勝景を四十八潭として次のやうに記してある。千綿川流程二里餘の間にあり。千綿川は水勢急にして相迫れる山岳を縫ひて流るゝ怪巖奇石到る處に龍幡虎嘯し水流之に激して奔騰す。嶮なれば即ち瀑布となり、夷なれば即ち淵となり其の景甚だ奇なり。然も之を知る者稀なりしが丹後守純顯山水の奇を愛し偶々此地に遊びたるより其名現はる。弘化二年の春純顯廣瀨淡窓を伴ひ此地に再遊し相謀りて潭名を改め潭毎に標を樹つ。其の主なるものを擧ぐれば古木潭、蓮花潭、白木潭、木葉不淨潭、龍頭泉潭、龍髯潭、留り潭等是なり。今も川のほとりに下流より岩淵、上中野淵、片平淵、名開淵、花巖經、土岩淵、蓮潭、呑空淵、龍頭泉等の苔蒸す石標が立つて居る。後三

者は何れも瀑布をなし最後の龍頭泉は千綿の瀧で、其の高さより八間瀧とも言はれ十五尋の瀧壺を穿ち、約百米下流に以前の瀧のあつた懸崖深潭を残し瀧の後退を明かに示して居る。

下流より細徑を分けて此等の奇勝を探り龍頭泉にて行き詰り、南又は北に百米以上の急崖を攀ち登れば景色一變して廣漠たる青野の原が開け、脚下に今まで見た峽谷の存在することを想像することも出来ない程である。

峽谷の水は數ヶ所に於て灌漑用水を分岐し、谷壁は崖の外は自然の密林が時々植林せられ等してゐる位であまり利用せられてゐない。臺地への通路も海岸の幹線から直ちに山腹の急坂を上るか或は大迂廻するかして居る。前者は上りが困難なことは言ふまでもない。第十二師團の兵が大野原演習場へ行く時は、この谷に來て鹽鶴から約一杆の間山腹の峻しい坂を上らねばならぬ。兵隊のよい鍛練になるから強兵坂と言ふ名が出来た。しかし兵卒から言へばこの坂こそ一大難關でよく落伍したくなるから一名落伍坂

とも言つてゐる。軍用道路の幹線は千綿の町から直ちに山腹にかゝり紆餘曲折する後者の模式的のものである。

5. 大野原

千綿川及び其の支流等のやうに若い谷に刻まれつゝある多良嶽西麓地方の鎔岩臺地の標式的ものは大野原臺地である。極めて緩な起伏を有つ臺地の表面は突然起る峽谷の外はまだ原型を保存する坦々たる草原であるから、明治二十年頃には某氏經營の牧場があつて牛馬等が飼養せられ、茶もすでに栽培されてゐたのであるが後荒廢し陸軍の演習地となつた。

大野原、水地、三本松、太ノ浦、太ノ原、中山等の閑村が點在する外は人煙も稀で幾ばくかの池水を用ひて水田が谷間に見られぬこともないが、此の地域の特徴としては茶園の多いことであらう。排水良好な高原の緩斜面を利用して嬉野を中心とする茶業地帯が夙に發達したのである。

五、東部—萱瀨川の流域

- 1、萱瀨段丘
- 2、上流の谷

1. 萱瀨段丘

大村扇狀地の堆積は萱瀨川の谷に侵入して原田下等の谷底には著しい砂礫の沖積地が發達して居る。谷はまだ幼いから谷幅は數十米に過ぎないが、堆積は谷の出口の坂口から約四軒中嶽に於ける萱瀨川本流と南河内より來る大支流の合流點まで及んで居る。萱瀨川は其の中を蛇行しながら凡そ十米内外の深さに小規模の峽谷を刻みつゝある。

段丘面は原では海拔六〇米、田下では九〇米—一〇〇米にある。萱瀨川流路の變遷と下刻の進行に伴ふて段丘は明瞭に二段となり、現に川の右左の岸にある狭い水田草地等は第三段となるべきものであらう。萱瀨小學校のある宮代では北の山を切つて出て來る二つの小支流が小さい扇をつくつて本流を南方琴平嶽直下に壓して

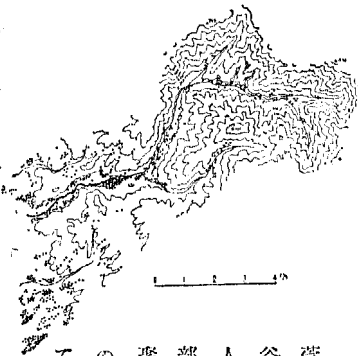
しまつた。川がこの地點で最も美事な峡谷を穿つて居る様子は二萬五千分一の地形圖に明示されてゐる。

段丘面は灌溉水の供給を十分に受けて残らず米作可能な田となつた。然し大村扇狀地で述べたと同様に石礫を除く勞はこゝでも多大に拂はれたのである。家々に石垣の多い風景はそれを物語つて居る。田下に於ける第一第二段丘間の沿道の家等屋根をも没するやうな壯大な石垣をつくつて裏の明り障子の所だけは石垣を特に低くせねばならなかつたやうである。

段丘上には水力を利用して所々に小規模の水車房が發達して居る。此等の水車では米を搗く他に陶土を製造するものがある。有田、波佐見、嬉野等肥前半島は窯業が盛であるから川棚川流域等に多いやうに水車が陶土製造に従事するのである。川水は比較的豊富であるから動力とするばかりでなく水簸するに大切なものである。原料陶土をはるく天草から船に積んで輸送し大村灣岸に陸揚して馬車で此等の川谷に運び立

派な陶土に精製して製陶工場へと送るのである。

第十三圖 萱瀬川流域の地形と聚落分布



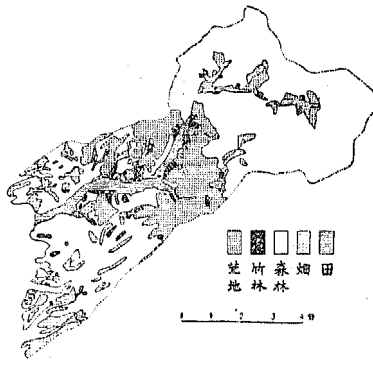
萱瀬川上流の深い谷では谷底のみに人家があり、西南部では沿岸段丘の乗落の外、高原狀の裾野にも散在してゐる所がある。

2. 上流の谷

多良嶽の中央部は侵蝕が甚しく進んで萱瀬川上流地方は比高五六百米の深い谷を刻み壯年の時期に達して居るやうである。下流よりの侵蝕は舊火口と思はれる黒木盆地に及び、谷壁の所々には集塊岩の奇景を現出して居る所もある。谷底は狭いから耕地も少く極めて僅かの水田が川筋に斷續存在してゐるばかりである。従つて

其處に居住する人々は耕作のみでは生計が立たぬから高い峻しい山に繁茂する杉、樺、櫟、櫟椎等の樹を伐り、大きい材は特別に圓木を横に

第四十圖 萱瀨川流域の開拓景



可耕地のうち谷底の灌漑水の得られる所は残らず水田となり裾野の緩な傾斜地には所々に畑もある。谷壁には到る所に竹が植えられてあるし西及び南に面する山地には草の密生する荒地が多いが次第に植林されてある。

並べ敷いた木材搬出路を設けて、川と並行する此地方の幹線道路の傍まで轉送し、此處から荷馬車で各地方に輸送して居る。建築材の他坑木として西彼岸の炭田地方に送るものもあり堅い木は鉋を以て割つて薪材としたり、山の所々に設置された炭竈で、木炭も製造され大村、長崎佐世保等の消費地に送り出されて居る。

谷壁には竹林も多く竹林は又一重要産物としてやはり前記地方に搬出されるのである。

六、結語

以上甚だ粗稿であつて誠に羞しことであるがこれで一先づ多良岳西麓地方の記述を終ることにしたい。殊に最後の萱瀨川流域については實地踏査も不十分で極めて杜撰なものであることをお詫びしなければならぬ。何れ又後日の機會に研究を進め度、なほ此の稿は多良嶽火山の西麓地方のみであつたが漸次他の方面にも及ぼしたいと思つて居る。何分淺學のことゝて觀察も不十分考察も不行届で、満足なる地理的景觀までにはまだ程遠いことゝ思ふ。一重に諸賢の御教示を煩はし度切に懇願致す次第である。

最後に本稿前半發表以來御懇切なる指導と激勵を賜つた東京、京都をはじめ各地の先學に對して厚く御禮申上度、又毎日曜日現地に同行して調査に助力を與へられた本校生徒田栗、谷上、田崎、船津、池添及び諸種の資料提供を惜

まれなかつた縣當局、町村役場、小學校、會社等の諸員に對しても併せて深謝の意を表し度く思ふ。(昭和四・一二・二〇)

參考文獻 (其二)

⑧ 保柳睦美 文化景觀の理論的研究 (地理學評論第五卷)

⑨ 長崎縣東彼杵郡誌 (長崎縣東彼杵郡教育會發行)

富士山の標高に就て

陸地測量部

主題に關しては新聞紙の屢々報導せる處なるも何れも正鵠を缺くものあるを以て茲に大正十五年測量當時の狀況を記述して參考に供せんとす。

一、侵蝕作用と山頂

富士山は熔岩瘤及碎屑物の類層より成り山容は整然として雲表に聳え、其の最大傾斜線は對數曲線を成すと謂ふも山層は幼年期に屬するが故、風雨氷雪の破壊力に依る經年變化又尠からず、大正十五年震災復舊測量當時山麓の諸點に於ては毫も變化を認めざりしも、山腹の小富士及不淨ヶ岳三角點の如き山形を成せる者は其頂の碎屑は著しく喪失し標石を露出するに至らし

む、其量は四十年間に大なるものは約〇、六〇米に及べる者もあり、然して山頂の岩石地に在りては基準となるべき標識物なきを以て、疊に岩石の崩落せる證據に依り侵蝕作用を認むるも其量を知る事能はざりしを遺憾とす。

二、從來の富士山頂標高

從來富士山の標高としては陸地測量部發行地圖に標記されたる獨立標高三七七八米を以てせり、然して其決定法は明治十八年三等經緯儀に依り山麓の諸點より圖示の如く直規法に依る間接水準測量を以て先づ舊富士山四等三角點の標